

不安です……物凄く……。

「……何か、考えでも？」

古泉くんの問いかけに、涼宮さんつた
ら、ここ最近でも特大級の笑顔を浮かべ
るだけなんですけれど……あのう、あた
しもその、もしかして何かしちゃうん
でしょうか……？

「うん。そんなたいしたことじゃないの
よ。ま、今すぐってのもアレだし、明日
でいいわね。そうと決まれば、早速準備
に取りかかるわ。ああ、古泉くんやみく
るちゃんは手伝わなくていいわ。キョ
ンに悟れたらマズいんでしょ？ 今回は
トクベツに、あたしが全部セッティング
しておくから」

せせせ、せっていんぐ……って、い
たい何をするつもりなんですかあ！？

「だから、あとはあたしに任せておけば
いいのよ！」

思いついたら一直線の涼宮さんは、
がばつと立ち上がるとそのまま喫茶店
から出て行っちゃいました……。止める暇
なんてありませんし、そもそもあたしに
止められないです。

い、いいのかなあ……本当にいいの、
あのままにしておいて？

「いやはや、困りましたね」

なんだかあたしには、あのまま涼宮
さんが暴走しそうな気がして怖いん
ですけれど……でも古泉くんは、ひょい
と肩をすくめるだけです。

「思いつきで話を作るのには苦勞しま
したが、最悪の事態が避けられたとい
う点では、上出来と言えるでしょう。閉
鎖空間も発生していないようだからね」

「あ……え？ 思いつき？」

それじゃあ……今、古泉くんが涼宮
さんに話したことって全部……嘘なん
ですか？

「嘘は極一部ですよ。彼から相談を持
ちかけられた云々の箇所だけです。それ
以外は、概ね合っています。しかし、涼
宮さんの逆鱗に触れるのと彼に怒鳴ら
れるのでは、規模が違いますからね。涼
宮さんに閉鎖空間を作らせないため、
と言えれば彼も納得してくれるでしょ
う」

「あのう……それじゃ、朝倉さんとキ
ョンの間にトラブルがあったって言う
話も、涼宮さんを納得させるための嘘
……ってこと？」

「それは事実です。それに、朝倉さん
がこの街に戻ってきていることも確か
です。何しろ、つい先ほど会って来ま
したから」

「え、そうだったんですか？」

うーん、古泉くんのお話って、ど
こまでが本当でどこからが嘘なのか、
よくわかんなくなりました……。

「会った印象としては……そうですね、
前から聞き及んでいた雰囲気とは少し
違って、というところでしょうか。た
だ、彼と接触するのは何かと面倒が増
えるので自重してもらおうと釘を刺し
ておいたんですが……状況が変わりま
したね。さて……どうなるかは神のみ
ぞ知る、でしょう」

「それじゃあ……キョンさんと朝倉
さんは、会わせない方がいいのかしら？」

「かもしれないが、会った方がいいの
かもしれない。それは僕らで判断すべ
き問題ではありません。ただ、禍根あ
る二人

が会ってギクシャクする前に……そう
ですね、そのときは朝比奈さんにお任
せいたします」

「えっ、あ、あたし……ですか？ で、
もあたし、そういうことはちよつと苦
手で……」

「いえいえ。むしろ、朝比奈さんこそ
が適任ですよ。期待しています」

さっ、期待されちゃってもそのう……
あたし、自信ありません。

あたし……あたしに、何かあった
ときに何がでるんでしょうか……？

the last day

「おうい、みくるーうっ」

月曜の朝、登校したあたしに向か
ってぶんぶん手を振って挨拶をして
きたのは鶴屋さんでした。お休みの
次の日とか、そういうことはまったく
関係なくていつも元気で、見ている
だけでこっちも元気になっちゃうのが
鶴屋さんですよ。

「やあやあ、おっはようさんっ！」

「おはようございます」

「ハルにゃんから伝言があるよん。え
っとね……よつと」

と言いながら、スカートのポケット
から一枚の紙を取り出して、コホンと
咳払い。

「本日、鶴屋さんの家で花見をする
から放課後直行すること。以上！ 追伸。
みく

るちゃんはメイドコスチュームを忘
れなように！ だつてさ」

え、お花見……ですか？ わあ、あ
たしやったことないから、すつごく
楽しみ。

でも、鶴屋さんのお宅でやるん
ですか？ 涼宮さんのことだから、急
に決めちゃったのかなあ。昨日会
ったときはそんなことも何とも言
わずに、終始朝倉さんの話で過
ぎちゃったわけだし……。

「ごめんなさい、鶴屋さん。なん
だか迷惑かけちゃってるみたいで」

「うっはっはっ！ んなことないよ
つ。花見はこの時期しかできない
じゃん。ぶあーつと楽しむのが一
番っさ！ ぶあーつとねっ！ だ
から会場がウチだろうが他所
だろうが、どこでも問題なっしん
ぐっ！ ンでもさ、なんでまた急
に今日花見をやることになった
んだよ？」

「さあ……？ あ、でも」

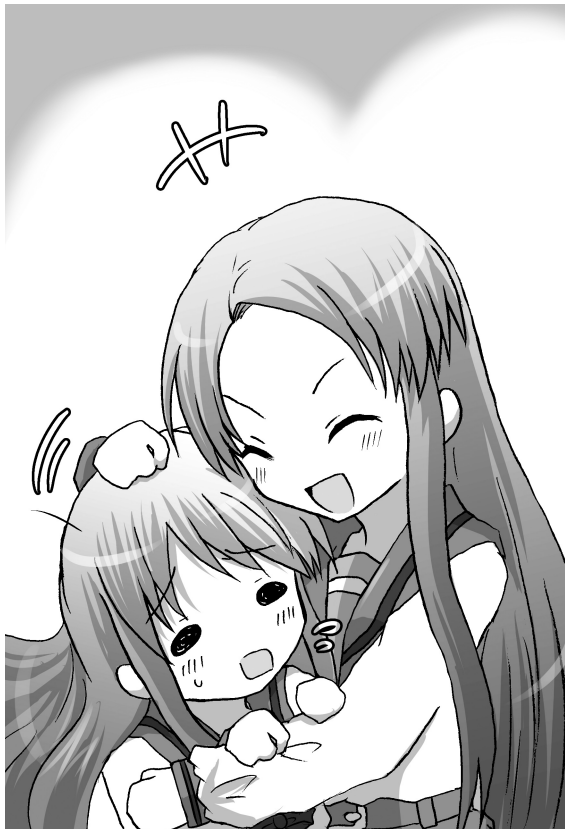
昨日の話が理由で今日は花見……
ってことなんじゃないか？ でも、
なんで花見なのかしら？

「はっはーん、にやるほど」

昨日あった話の大筋……だと思
うんですけど、キョンくんがケン
カしてて、とか、その人は転校し
ただけで戻ってくるみたいで、つ
つて、そんな感じで鶴屋さんに
話したんですけど、何を感じ取
ったのか、にやりと笑いました。

うう……またあたし、余計な
こと喋っちゃったのかしら……？

「うん、まあ話を聞けばハルに
ゃんの考えたことってのは、すぐ
わかるっさ。用はキョンくん
とケンカしてる相手も一緒に



連れてきて、花見の席で仲直りさせよーって魂胆じゃないのかい？ うんうん、花見ってのはそーやって楽しむのいいもんっさ。となると、もう一人前追加しとこっかねっ！」

「あのお、あたしも何かお手伝いしましょうか？」

「いいよいいよっ！ 何もあたしがぜーんぶ用意するってわけじゃないんだしさっ。それにみくるもお客さんだよっ。何もしなくて万事おっけーっさ！」

「でも、ご迷惑ばかりかけちゃってますし……何かお礼をしたいなあって、」

「ううん、みくるは偉い子だなあっ！」

「はわわっ！」

きゅっ、急に鶴屋さん、あたしをがばつと抱き寄せて頭をぐりぐりぐりぐり……

……ふええええ……や、やめてくださいいっつ。

「みくるはアレだよっ、みんなに美味しいお茶を淹れてあげてるじゃんっ！ それでみんな和ませてるし、キョんくんなんでも、んもおっすっごいよっ！ お茶一杯で『この世の極楽』って顔してっからさっ！ それってある意味、才能だよっ。なんつーの？ すっげーっ！ って感じによろよ」

「でもあたし……そのくらいしかないですから」

「何言ってるのっさ！ それってつまり、おいしーお茶を淹れられるのは、みくるしかないってことじゃん？ あたしには出来ないって！」

「そ、そうなんでしょうか……？」

「そーそーっ！ だからさっ、んもーっ！ バッリバリに自信もっちゃっていいんだよっ！ ねっ!?」

あたしにできること……お茶を淹れてみんなに振る舞うことが、あたしにしかできないこと、なのかしら？ よく……わかりません。

「んなわけで、今日のお花見、忘れちゃダメによろよっ」

そう言っであたしを離れた鶴屋さんは、そろそろ朝のホームルームが始まる時間になることに気づいて、自分の席に戻っていきました。

お茶を淹れてみんなに振る舞うこと……あたしじゃないかって、誰にでもできることじゃないですか。でも、鶴屋さんは、それがあたしにしかできないことだっって言うてくれます。

どういふことなのかなあ……？

お花見っていう行事については、それなりに知識はあります。けど、情報で知ってるのと、実際に体験するものとは違うと思うので、実際に体験してみないことには、やっぱりわかりません。それに、涼宮さんが立案したことですから、どこまで由緒正しいお花見なのかは……ちよつと不安です。

「そいじゃみくる、行こうぜいっ！」

「はい……あ」

そういえば……鶴屋さんが伝えてくれた涼宮さんからの伝言で、いつも部室で着ているお洋服を持って行かなくちゃってことを、思い出しました。お昼のうち

に用意しておこうって思っ、すっかり忘れちゃってました……。

「ごめんなさい、鶴屋さん。あたし、部室から荷物を持ってこなくちゃ」

「ありゃ？ そいじゃ一緒にこっか？」

「ううん、一人で取ってきますから。それに、他のみなさんが先について、鶴屋さんがいなかったら困ることになるでしょう？ 先に行って」

「そうかい？ んじゃまっ！ 先に行ってるね。それじゃあたしん家で会おうっ！」

しゃきーん、つと効果音が聞こえてきそうなお札を決める鶴屋さんと下駄箱で分かれて、あたしはその足で部室棟へ向かいました。

でもなんで部室で着ているお洋服が必要なのかしら？

お花見と部室で着ているお洋服の関係性を考えつつ部室へ向かえば、ドアの前に立っている人影がひとつ。

お客さんかな？ と思いましたが、すぐその長い青みのかかった髪を見て、すぐに誰なのかわかりました。

金曜日の買い出しでデパートのお茶屋さんで会って、それでキョんくんとケンカしてるっていうことを後に古泉くんから聞かされた、朝倉さんその人で間違いないさそうです。

なんでこんなところに……っ、そ、そ、そ、そういえばあたし……朝倉さんに『自分のことは黙っていて』って言われて、それなのにいろいろ話ちゃって、なんだか話が大きくなっちゃって、ええつとええつと……はわっ！ こ、こっちに気づいてしまいました……。

どうしてここにいるのか、その理由はよくわかりません。けれど……でもこの学校の制服を着て、少し思い悩んでいるような表情を浮かべていました。

「こんにちは……」

「ごっ、ごめんなさい！」

朝倉さんがここに来たっていうことは、それってつまりキョんくんと会うってことかもしれないで、それってだから自分から謝りに行くまで内緒にってことだったかもしれないで。

だからあたしが約束を破っちゃった時点でキョんくんは朝倉さんのことに気づいてるかもしれないから……ええっと、だからあたし、まずは謝らなくちゃって思っ

「あの、あたし、えっとその……キョんくんとケンカしてるなんてこと知らなくて……内緒にって言われたのに……そのう……もしかして危ないことになるかも、なんて早とちりして、それで話ちゃって……」

もう何を言っても言い訳みたいになっちゃって、自分でもすっごい混乱してるのがわかつちゃったものだから謝罪の言葉も続かなくなっちゃいました。

「あのう……怒ってます？」

頭を下げたまゝ、沈黙を守ってる朝倉さんのことが気になってちらりと覗き見たら……ちょっと呆気に取られた表情を見せていたかと思うと、ふうっため息をひとつ。

「ううん。内緒にしていっていいのは、わたしの勝手な言い分だもの。結果的には……ありがと、かしら」

「え？ あの、それじゃえっと……」

「昨日、彼に会ったの。ぎこちなさはあるけれど、学校で会おうねって話もしたから」

あ……じゃあそれなら……。

「キョんくんと仲直りしたんですか？」

「それは……どうかしら。でも今日、再編入の学力テストを受けに来たの。うまく行けば、今週中にはまたここに通うことになるから、そのとき普通に挨拶ができそう、かな」

「わあ、そうだったんですかあ」

よかったあ。朝倉さん、キョんくんと仲直りしたんですね。やつぱり、ケンカはしちやダメですよ。

「よかったですね、ホントに。あ、そうだ。よかったらお茶でも飲んで待っていませんか？ 最近、長門さんにも……あ、長門さんのことはご存じですか？」

「え？ あ、ええ。もちろん。同じマンシヨんだから」

「あ、そうだったんですかあ。その長門さんにも、わたしのお茶、おいしいうちで言ってもらえるんですより。ですから是非、朝倉さんにも」

「え？ いえ、でもわたしはそろそろ、」

「どうぞどうぞ」

あたしがいろいろ心配して慣れないことしちゃってましたけど、やつぱりキョんくんですね。あたしの心配も他所に、ちゃんと仲直りしてるなんて。

結局あたしは何もできなかったですけど、でもそれならせめて、お茶でもご馳走しないと。だって鶴屋さんも言ってくれたじゃないですか。お茶を淹れるのは、

あたしにしかできないことだって。

だから、約束を破っちゃったり——朝倉さんは知らないかもしれないけど——余計なことをしちゃってたお詫びに、お茶を淹れようって思っ

「はい、どうぞ」

「ありがと」

いつものように、あたしができる精一杯のことをして差し出したお茶を、朝倉さんに。これができるのはあたしだけ、って言われても、だからと言ってすっごく自信があるわけじゃありません。いつも「おいしい」って一言を聞くまで、ちよつと不安なところもあります。

「どう……ですか？」

「美味しい。とっても美味しいわ、朝比奈さん」

笑顔が浮かべる朝倉さんに、あたしも自然と笑みがこぼれます。よかったあ、お口に合っ

「いつでも飲みに来てくださいね」

キョんくんとも仲直りしたみたいですし、またこの学校に通うようになるんですよね？ それなら、何も今日だけってことじゃないんですよ？

「ええ、また……学校に通うようになったらまた、お邪魔させてもらうね」

湯飲みを手に微笑む朝倉さんは、本当に……なんて言うのかしら？ 楽しそうで、嬉しそうで、それを見て「ああ、そうか」って思っ

鶴屋さんや森さん、古泉くんが言ってくれた言葉の意味が、ほんのちよつぴりですけど、わかつたような気がします。

あたしにできること、あたしにしか出

来ないことは、誰もができるお茶を淹れることです。でもそれで、みんなから笑顔を引き出せるんで、それってあたしの勘違いかもしれないし、勝手な思いこみかもしれないけど……。

でもたぶん、それがみんなが言ってくれる『あたしにしかできないこと』なんじゃないかしら？

さっきまでどこか不安そうな表情を浮かべていた朝倉さんが浮かべる笑顔を見て、あたしはそう思いました。